

ソヴィエト科学の“脱スターリン化”と科学アカデミー —1953-1956年のソ連邦科学アカデミー幹部会議事録・速記録から—

市川 浩

広島大学大学院総合科学研究科

“De-Stalinization” of Soviet Science and the Academy of Sciences : From the Minutes and the Stenographic Notes of the Presidium Meetings of the USSR Academy of Sciences, 1953-1956.

Hiroshi ICHIKAWA

Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

Abstract

Many of the recent studies about the history of Soviet science, based on previously classified sources in Russia, seem to be concentrated on the issues characteristic to the late Stalin era, such as Lysenkoism, with some exceptions like Slava Gerovitch's work focused on the diffusion process of 'Cybernetics' during 1950s and 1960s. Drawing mostly on the records of the Presidium Meetings of the USSR Academy of Sciences during the three years from 1953 to 1956, immediately after Stalin's death to the end of the year of 20th Party Congress, I would like to try to provide a general view of the “de-Stalinization” efforts made by the leading Soviet scientists in its very early stage.

はじめに

独裁者ヨシフ・スターリンは、ソ連邦最初期の核開発計画の掉尾を飾る水素（熱核）爆弾実験成功も、1947年にはじまる大規模なイデオロギー・キャンペーンであった“学問分野別討論”の最終的帰趨も眼にすることなく、1953年3月5日、“学問分野別討論”の一環をなす言語学論争への介入の際にしめした「批判の自由、真理の独占反対」支持と他方における農業科学、生物学分野における“真理の独占者”ルィセンコへの支持という、相反する行動の“謎”を科学史の世界に残して突然死去した¹。

言うまでもなく、ソ連邦社会全体の“脱スターリン化”がすすむのは、1956年2月に開催されたソ連邦共産党第20回大会におけるニキータ・フルシチョフのいわゆる「スターリン批判」以降のことである。

しかしながら、スターリンの死、続くラブレンチー・ベリヤの逮捕はその直後から当時のソ連邦市民、とくに知識人に独特の解放感をもたらした。旧ソ連邦における代表的な文芸誌『新世界』1953年12月号に作家ヴラジーミル・ポメラツェフ（Владимир Михайлович Померанцев : 1907-1971）の論文「文学における誠実さについて」²が掲載され、文学的描写における過剰な類

型化を批判し、よりリアルな創造が呼びかけられた。1954年には党の理論誌『コムニスト』にも、公式主義を排し、人文・社会学者に「創造的議論」を呼びかけた無署名論文「科学と実践」が掲載され³、旧ソ連の知識層の間に“雪解け”の機運が広がっていく。

ジョレス・メドヴェージェフ（Жорес Александрович Медведев: 1925-）の衝撃的な著作『ルイセンコ学説の興亡』（1969年）⁴以来、すっかり定着してしまったかのように思えたソヴィエト科学観、すなわち、ソヴィエト科学を全体主義国家のもとにおける党・国家統制の犠牲者として描く見方は、ソ連邦解体後の資料公開のなかで再検討され、それに替わる解釈がさまざまに提起されてきた。しかし、その多くが、権力の側からの科学への介入が激しくなった一方で、科学の側も多数のノーベル賞受賞に結果するような成果を旺盛に挙げていたがゆえに、科学と権力との関係というテーマにとってもっとも関心を惹く、まさにクライマックスとも言うべき時期にあたるスターリン後期（1945～1953年）を対象としており、意外に“脱スターリン化”過程を扱ったものは少ない⁵。

そのなかで、スラヴァ・ゲローヴィッチ（Slava Gerovitch）は例外となっている。彼はイデオロギー活動に特有のジャーゴンに彩られた党イデオロギーが使用する言語（パロール）を Newspeak と定義し、ノーバート・ウィーナー（Norbert Wiener: 1894-1964）によって“ひとと機械の共通言語”として提唱されたサイバネティクスの論理言語を Cyberspeak と呼び、スターリン死後の“雪解け”の時期、Cyberspeak は公然と Newspeak に挑戦し、科学における非スターリン化の牽引車となったとしている。サイバネティクスは、1949年中には旧ソ連邦に伝わり、哲学者からの猛烈な攻撃を受けながらも、数学者セルゲイ・ソボレフ（Сергей Львович Соболев : 1908-1989）、アレクセイ・リャプーノフ（Алексей Андреевич Ляпунов : 1911-1973）らの勇気ある擁護によって科学者の間で支持を広げてゆく。ソボレフらは、マルクス、レーニンからの引用がふんだんにちりばめられたかたちでの、Newspeak によるサイバネティクスの包摂を拒否することで、哲学者の科学にたいす

る“番犬”としての役割を否定し、サイバネティクスによる科学全般の再編を企図するなかで、生物学にまで影響を広め、悪名高いルイセンコによる生物学における“真理の独占”にも挑戦した。1955年前後には彼らの挑戦は報いられ、ソ連邦共産党はその1961年党綱領、いわゆる「第3綱領」でサイバネティクスを高く位置づけ、やがてブレジネフ時代になるとそれを“社会の科学的管理”手法と規定するまでになった⁶。

しかし、科学史研究の多くが踏襲している方法として、ゲローヴィッチの著作においても、特定の分野、この場合は数学・数理科学の分野、特定の科学者、この場合は数学者リャプーノフや無線工学分野で活躍した軍人技術者アクセル・ベルグ（Аксель Иванович Берг : 1893-1979）など一連の科学者の行動に沿った記述が貫かれている。ソ連邦におけるサイバネティクス受容は数学・数理科学の分野が震源地であることには間違いはないし、ゲローヴィッチの著作では他分野の科学者を巻き込んでいった点も正当に目配りされているとはいえ、さまざまな分野で活動する科学者を、利害の多様性・分岐を前提としつつも、ひとつの社会層・社会集団として全体的にとらえる点でいささか不充足さを感じないわけにはゆかない。

ニコライ・クレメンツォフ（Nikolai Kremontsov）は、第2次世界大戦の結果として、一方では科学者をはじめとする専門家の権威が上昇し、他方では戦時入党キャンペーンの結果、ソ連共産党員が大幅に“大衆化”したというソ連社会のドラスティックな変質のなかで、権力者が科学者をより尊重するようになった、としている⁷。核開発は言うまでもなく権力の物理学にたいする態度を変え、そのリーダーであったイーゴリ・クルチャートフ（Игорь Васильевич Курчатов : 1903-1960）に“原子力のツァーリ”とも呼ばれる高い権威と政治的発言力を与えた。ロケット開発におけるセルゲイ・コロリョフ（Сергей Павлович Королёв : 1907-1966）もまた然りである。権力に果実を与える具体的、物的成果ということでは、さらにコンピュータ開発が想定されるが、数学者ミハイル・ラヴレンチェフ（Михаил Алексеевич Лаврентьев : 1900-1980）はフルシチョフとの“ウクライナ・

コネクション”を活かしながら、アナログ計算機に固執した勢力を向こうに回して局面打開を主導した⁸。

こうした科学者たちは、ひとつの集権的な自治組織に自己を組織し、それを通じて行動していた。この組織こそ、ソ連邦科学アカデミーであり、他の国には見られない、独自の権威・権力をもってソ連邦社会で科学研究に携わる科学者のうえに君臨していた⁹。ソ連邦の科学者の全体としての動向を探るためには、まず科学アカデミーにおける議論とその方向性を吟味する必要がある。本稿では、この科学アカデミーの最高議決機関である総会の常設機関として活動の基本的な方向性を決めていた幹部会（Президиум）の議事録・速記録から、当時第一級の科学者として相当の権威をもち、科学研究全般に大きな影響をもつ決定に携わった、科学者のなかの権威・権力者とも言える幹部会員が“脱スターリン化”期の最初期、すなわち、スターリンの死の直後から、概ね1956年の末までの時期（スターリン批判で知られるソ連邦共産党第20回党大会は1956年2月に開催されたが、ソ連邦市民にニキータ・フルシチョフの報告全文が示されるのは1959年のことである。ただし、大会出席者などの口を通じてに情報は広まっていったようであるので、ここでは、とりあえず、1956年末までを検討の対象としている）に集団としてどのように行動したかを明らかにすることによって、数学・数理科学分野を中心に“脱スターリン化”過程を追究したゲローヴィッチの研究を多面化・豊富化してゆきたい。

ソ連邦科学アカデミー幹部会はほぼ毎週1回開催されていたが、その業務の中心は、傘下各研究所・研究機関から承認をもとめられた人事、上級研究員の資格審査、学位の授与などの追認といったルーチン・ワークにあり、科学史、あるいは政治史上重要なできごとに関する討議・方針策定に携わることは、実はそれほど多くない。また、幹部会には幹部会員だけでなく、各議題に関連した科学アカデミー会員、同通信会員、および傘下研究機関の研究員などが陪席しており、場合によっては会議参加者数が100名を超えることもあった。

筆者は2010年9月、11月、2011年3月、9月と4回にわたり、モスクワに立地するロシア科学アカデミー文書館で幹部会の議事録・速記録の調査に従事し、この時期、“脱スターリン化”に関連した事項で幹部会において繰返し討議されているテーマが、①哲学者を“封じ込め”る動き、②生物学・遺伝学の“正常化”にむけた動き、③科学アカデミーの機構改革についての議論、の3つに整理できることに気が付いた¹⁰。

以下、この順番に幹部会における議論の展開を見てみよう。

文書館文書は、一般に、「フォンド（Фонд：Ф.：ストック）」、「オーピシ（Опись：Оп.：目録）」、「デューロ（Дело：Д.：ファイル）」という3層の区分に従って整理されている。本稿ではロシア科学アカデミー文書館（Архив Российской Академии наук：以下、Архив РАНと略す）所蔵の資料を活用しているが、引用した文書館資料がこの文書館のどのフォンド、どのオーピシ、どのデューロに整理されているかをそれぞれの引用注に示しておく。その際、л. ないし、лл. はシート番号を示す。なお、文書館資料については、報告作成者名、執筆者名をイタリックで示すことはしていない。

旧ソ連邦の科学者については、その初出箇所での名前の原綴り、生没年をしめしておいた。必要がある場合は若干の伝記的事項を加えているが、その情報源となったのは、おもに、「ロシアの科学者・百科事典（Энциклопедия：Учёные России：<http://www.famous-scientists.ru/>）」、「アカデミー会員辞典・百科事典（Словари и энциклопедии на Академике：<http://dic.academic.ru/>）」などのサイトである。

I. 哲学者の“封じ込め”

(1) “学問分野別討論”と哲学者たち

1947年にはじまる“哲学討論”を皮切りとして1950年代はじめまで、かなり大がかりな規模でおこなわれた“学問分野別討論”は、発動者の側にあつては冷戦激化に際して必要なイデオロギー的引き締め以上の政策意図はなかったにもかか

ならず、それまでの、とくに戦時期における科学研究体制の歪みを背景とした科学者たちの不満を“イデオロギー的言説”をまとめた、ねじれたかたちで爆発させることとなり、いくつかの分野で深刻な影響を与えることとなった。とりわけ、独裁者スターリンが直接介入した言語学と生物学・遺伝学の両分野において事態は発動者の思惑を遙かに超えた地点まで進展してゆくことになった¹¹。

この“学問分野別討論”のもうひとつの帰結が、ゲローヴィッチの言う Newspeak の担い手としての哲学者・党イデオログの権威と役割の著しい増大であった。この過程で彼らはさまざまな学問分野におけるイデオロギー的“番犬”として畏怖されるようになった。冷戦期プロパガンダ言説の“永久機関”的自己拡張¹²のひとつの帰結として、彼らの注意は西側諸国における現代諸思潮の“反動的・ブルジョワの本質”に向けられ、諸思潮の解説とその批判が仕事の大きな部分を占めるようになっていった。1951年、哲学者・党イデオログの拠点であった科学アカデミー・哲学研究所ではこの課題に関する包括的な著作を出版した。『哲学者ぶった米英帝国主義追従者に抗して—現代米英ブルジョワ哲学・社会学批判要綱—』と題されたこの共同労作では、現象主義、プラグマティズムなど、一連の西側思潮が取り上げられていた¹³。さらに、哲学研究所（の現代ブルジョワ哲学・社会学批判セッション）は1953年、新カント派哲学を先頭としてサイバネティクスにいたるまで、批判と超克の対象となる17の現代ブルジョワ思潮を列挙した¹⁴。スターリンの死は、冷戦の激化を背景として、哲学者が科学研究と科学者に対して西側の諸思潮の影響が現われないよう、思想監視活動を著しく強化していたその最中のできごとであった。

(2) 科学アカデミーの“哲学離れ”とユーリー・ジダーノフ失脚

しかし、スターリンの死去からわずか8日後の時点から、早くも科学アカデミーの“哲学離れ”をしめすできごとが起こる。この日開催された科学アカデミー幹部会は、1952年11月21日付で科学アカデミーの編集のもと出版が決められてい

た共同の著作『弁証法的唯物論と現代自然科学』の編纂作業をあっさりと棚上げすることにしたのである。理由は、①まだ見解の一致をみていない問題が多く、広範な事前検討が必要であること、②編集に携わるものの多くが本来の研究活動などで多忙であること、③とくに科学アカデミー・化学部、生物科学部所属の書き手が当該著作の執筆に着手できていないこと、とされ、この著作にかわって、新たに『マルクス＝レーニン主義自然科学論の古典』と題する著作の編纂を哲学研究所に委ねることとされた。もちろん、1953－54年にも物理・数学部、化学部、生物科学部、地学・地理学部、工学部で引続き自然科学の哲学に関連した論文・著作の刊行に努めること、1954年には『弁証法的唯物論と現代自然科学』の編纂に取りかかるよう付言されてはいた¹⁵が、管見の限り、この著作編纂の議題が1956年末までに再度提起されることはなかった。

こうした変化の背景には、一連の“学問分野別討論”を主導した党幹部のユーリー・ジダーノフ¹⁶（Юрий Андреевич Жданов：1919-2006：戦後一時党のイデオロギー活動を指導したアンドレイ・ジダーノフ—Андрей Александрович Жданов：1896-1948—の息子。一時スターリンの娘婿であった）がスターリンの死後まもなくして失脚するという経過があったものと考えられる。スターリンの死からほぼ1ヶ月後の1953年4月6日付で、高名な画家イーゴリ・グラバーリ（Игорь Эммануилович Грабарь：1875-1960）、それに、すでに高齢ではあったが、地学者・古生物学者、作家として広範な人気を保っていたヴラジーミル・オーブルチェフ（Владимир Афанасьевич Обручев：1863-1956）と、若いがすでに高い名声をえていたソボレフの2名が科学アカデミーとモスクワ国立大学に勤務する科学者を“代表して”、3名連名の書簡を党中央委員会書記ニキータ・フルシチョフ宛に送った。そのなかで、彼らは党中央の自然科学・工学・高等教育機関課長ユーリー・ジダーノフの自然科学にとってたいへん有害な所業を精査するよう訴えた。このためもあって、当時党中央で進められていた機構改革のなかで、ユーリー・ジダーノフの課は新しく科学・文化課に統合

されることになり、彼は課長のポストを失うことになった¹⁷。

(3) 哲学研究所批判

科学研究の自由化をもとめ、その前提として哲学者たちのイデオロギー的管理を排そうとする科学者の思いはイデオロギー的“番犬”とも呼べる哲学者たちへの憎悪にまで発展していた。1955年、文化大臣をつとめていた哲学研究所前所長ゲオルギー・アレクサンドロフ（Георгий Фёдорович Александров：1908-1961）の大臣解任¹⁸を契機に科学者の哲学者にたいする憎悪が噴出することとなる。6月3日開催された科学アカデミー幹部会の席上、哲学研究所はその仕事の遅れ、長年1編の論文も書かないような怠慢な研究員の放置、前所長アレクサンドロフの指導力欠如などのほか、その自然科学にたいする有害な役割の故をもって激しく批判されることになる。決議は「哲学的科学としての唯物弁証法の全面的研究、哲学者と自然科学実験家との同盟強化の必要性、哲学者の活動と実生活の差し迫った要求との不可分性の関係に関するレーニンとスターリンの教えはこの研究所の指導原理とはまだなっていない。…（中略）… 哲学研究所のいく人かの働き手〔原文は работники…引用者〕は現代自然科学の哲学的問題に関して誤った立場をとっている。たとえば、ソ連邦科学アカデミー通信会員のアレクサンドル・マクシーモフ（Александр Александрович Максимов：1890-1976：かつての哲学研究所自然科学哲学セクターの指導者。…引用者）は相対性理論に対してニヒリスティックなアプローチをとり、まるでそれが弁証法的唯物論に反するかのようにして、その価値ある物理学的帰結を投げ捨てた。…（中略）… 多くの研究員はソヴィエト科学の個々の研究者の発言に“弁証法的唯物論”のレッテルを機械的に貼り付けることだけをみずからの課題としている¹⁹と述べている。討論では、この時期、哲学者・党イデオログの主流から外されていたボニファチー・ケドロフ（Бонифатий Михайлович Кедров：1903-1985：1949年、『哲学の諸問題』誌編集長を解任され、あわせて哲学研究所からも解職されていた）が哲学研究所の活動

を詳細に吟味し、批判する発言をした²⁰。また、物理学者ヴラジーミル・フォック（Владимир Александрович Фок：1898-1974）は「自然科学の諸問題を哲学の方面から説明した論稿を刊行しようとする」と妨害につきあたり、いつも党中央委員会の介入で〔刊行に…引用者〕成功していた」と苦々しく哲学者の阻害的な役割を告発²¹し、最後に心理学者のセルゲイ・ルービンシュテイン（Сергей Леонидович Рубинштейн：1889-1960：1949年、コスモポリタニズムの廉で、モスクワ国立大学の教室主任、哲学研究所のセクター主任の地位を追われていた）が激しく哲学研究所を批判して²²、討論を締めくくっている。

その後、6月17日にも、決議の文案を練り、仕上げるために、もう一度この問題での討議がおこなわれている。この討議では、若手幹部会員ムスチスラフ・ケルドウィツシュ（Мстислав Всеволодович Келдыш：1911-1978：1960-1961、科学アカデミー副総裁、1961-1975、総裁）が発言に立ち、決議の文面が哲学研究所前所長アレクサンドロフひとりに問題を負わせている表現になっていることを危ぶみ、修正を要求した²³。

もちろん、哲学研究所は西側の“ブルジョワ観念論”に対するイデオロギー闘争をやめることはなかった。1955年の12月になっても、彼らは『帝国主義時代のブルジョワ哲学と社会学』と題する参考書の編纂を企画している²⁴。しかし、それ以前の8月には彼らが編集・刊行していた雑誌『哲学の諸問題』誌に歴史的な論文「サイバネティクスの基本的特徴」が掲載され、“アンチ啓蒙家の科学”とされていたサイバネティクスの思想史的“解禁”が明らかにされたのである²⁵。

科学アカデミー総裁アレクサンドル・ネスメヤーノフ（Александр Николаевич Несмеянов：1899-1980：1951-1961、科学アカデミー総裁）は、1956年、「世界の科学のなかで第一位の地位をめざして」と題する自身の論文のなかで、ある偉大な物理学者の話として、「…まさに今開花しようとしている花のそばを通るひとの動きは、何百万分の1秒以下の単位でその開花の速度を変える〔と、その物理学者は真剣に信じている。…引用者〕。『哲学の諸問題』誌の編集委員会の誰ひと

りとして、自分は、大人の周りで跳躍したり、踊ったりすると病気の経過に影響するなどというシャーマンの信念と何ら変わらない観念論的なたわごとを宣伝普及しているのだ、と科学者のまえに明らかにすることに思いが至っていない」との発言を伝えている²⁶。過剰なイデオロギー的言説が跳梁跋扈した時代は急速に終息に向かおうとしていた。

II. 生物学・遺伝学“正常化”にむけて

(1) セヴェルツォフ再評価と『ニコライ・ヴァヴィロフ選集』

クレメンツォフによれば、リュセンコ学説の覇権確立のあとも、伝統的な遺伝学は、いくつかの研究拠点ではそぼそと研究が継続されていた²⁷。そのひとつ、細胞学・組織学・発生学研究所（旧称、実験生物学研究所）の所長であった（1949年には解任されている）グリゴリー・フルシチョフ（Григорий Константинович Хрущов：1897-1962）は、有名な農業科学アカデミー8月総会のあと、リュセンコ派によるニコライ・ドゥビーニン（Николай Петрович Дубинин：1907-1998：ソ連邦において正統な遺伝学を守ろうとした）批判の声が高くなると、それに便乗して自らの研究所の一員であったドゥビーニンをある論評のなかで激しくこき下ろし、みずからの保身を図った人物である²⁸が、スターリンが亡くなると、その死の直後から、トロフィム・リュセンコ（Трофим Денисович Лысенко：1898-1976）を頭目とするリュセンコ派によって否定された科学者の復権をめざした行動を起こす。1953年3月27日の科学アカデミー幹部会で、その数年前、その世界観に“観念論的形而上学”が見られるとして批判されたアレクセイ・セヴェルツォフ（Алексей Николаевич Северцов：1866-1936）を再評価するよう、きわめて慎重な言い回しで問題を提起したのである。いわく、「共産党第19回大会がソヴィエト科学に提起した偉大な課題は世界の科学のなかに第一位の地位を占める、ということですが、この課題はソヴィエト科学が歩んだ道の注意深い評価、学問の各分野における直近の、そして将来

の課題の明確な定義を要求しています。…（中略）… 動物形態学の分野におけるものの見方と理論的一般化のこうした体系には、アカデミー会員アー・エヌ・セヴェルツォフの諸著作のなかで発展させられた方向性、“セヴェルツォフ進化形態学”という呼称をもつにいたった方向性が属していません。今日、アー・エヌ・セヴェルツォフの見方はきわめて広く普及し、宣伝され、その著作にたいする関心はかなりの程度蘇生しました。…（中略）… 彼の理論がすべて公式主義的なのは理論のなかに形式が存在し、内容と関わりなく、勝手に変化しているからなのです²⁹。

セヴェルツォフは、帝政時代に活躍した生物学者、ロシアにおけるダーウィン学説紹介者のひとりで、進化形態学の創始者のひとりとして目されていた。1948年8月の段階では、「ワイスマン＝モルガン流の西欧観念論生物学の側からの反動的非難からダーウィン主義を守り、発展させた」「傑出した科学者」のひとりとしてされていた³⁰が、その後のリュセンコ派によるイヴァン・シュマリガウゼン（Иван Иванович Шмальгаузен：1884-1961：自他ともに認めるセヴェルツォフの後継者で、1949年まで、その名も科学アカデミー・アー・エヌ・セヴェルツォフ名称進化形態学研究所所長であった）批判の都合で、その世界観に“観念論的形而上学”が見られるとされていた。3月27日の幹部会の議場にいたリュセンコ派のひとり（と思われる）ヴェー・ペー・ガガーリン（В.П. Гагарин：名・父称、伝記的事実不詳）という人物のグリゴリー・フルシチョフにたいする反論によると、すでに高等教育大臣のもとで特別の学術会議が15名の生物学者と15名の哲学者の参加で、500人の聴衆を集めてモスクワ国立大学の講義室を会場に開催され、この問題は決着していたはずであった³¹。セヴェルツォフの評価問題は、このため、ロシア科学史上の大きな問題となり、科学アカデミー幹部会の呼びかけで「アー・エヌ・セヴェルツォフ著『進化形態学』の批判的評価と動物形態学の課題に関する会議」の招集が図られていた。グリゴリー・フルシチョフはその組織委員会の副委員長としての資格で提案したのであった³²。

この「会議」は4月24、25両日に開催された。

それを受けて開催された5月22日の幹部会で採択された決議では、「自然発生的な弁証法的唯物論者としてのセヴェルツォフ理解のはじまりとなった、アー・エヌ・セヴェルツォフのものの見方に関する最初の哲学的評価はアー・エム・デボーリンによって、マルクス主義の立場からではなく、メンシェビキ的観念論という誤った立場からなされたものである」³³とされ、哲学者アブラム・デボーリン（Абрам Моисеевич Деборин：1881-1963）ひとりに責任を負わせることで決着が付けられ、セヴェルツォフの名誉は回復された。これは、スターリン死後におけるルィセンコ派への、科学アカデミー幹部会を舞台とした最初の反撃となった。

1955年1月13日、グリゴリー・フルシチョフは幹部会にニコライ・ヴァヴィロフ（Николай Иванович Вавилов：1887-1943）の著作選集の編纂を決定した科学アカデミー・生物科学部の審議を追認するよう提案した³⁴。ソ連邦最高裁判所軍事参事会による名誉回復は1955年8月20日であるが、この段階ですでにニコライ・ヴァヴィロフ復権の機運が高まっていたのであろう。不思議なことに、この提案について誰も意見を述べるものはいなかった。この提案は、ちょうど1年後の1956年1月13日の幹部会で本採択となっている³⁵。

(2) 「300人の手紙」と物理学者の異議申し立て

ドゥビーニン、ヨシフ・ラポポルト（Иосиф Абрамович Рапопорт：1912-1990）、アントン・ジェブラック（Антон Романович Жебрак：1901-1965）をはじめとする70名の生物学者とイーゴリ・タム（Игорь Евгеньевич Тамм：1895-1971：1958年、ノーベル物理学賞受賞）、ピョートル・カピッツァ（Пётр Леонидович Капица：1894-1984：1978年ノーベル物理学賞受賞）、レフ・アルツィモヴィッチ（Лев Андреевич Арцимович：1909-1973）、レフ・ランダウ（Лев Давидович Ландау：1908-1968：1962年、ノーベル物理学賞受賞）、アンドレイ・サハロフ（Андрей Дмитриевич Сахаров：1921-1989：1975年、ノーベル平和賞受賞）、ヤコヴ・ゼリドヴィチ（Яков Борисович

Зельдович：1914-1987）、ヴィタリー・ギンズブルグ（Виталий Лазаревич Гинзбург：1916-2009：2003年ノーベル物理学賞受賞）など高名な物理学者を中心とした他分野の科学者24名、計94名連名の1955年10月11日付書簡がソ連邦共産党中央委員会幹部会宛に発送された。この書簡には翌年2月に、生物学者を中心に203名の追加署名が届けられ、計297名連名の書簡ということになった。第2次署名者には、今度は、ラヴレンチェフ、ケルドウィッシュといった高名な数学者、ソボレフ、リャプーノフといった数学者・数理科学者にして、サイバネティクス運動の担い手を多く含んでいた。これが名高い「300人の手紙」である³⁶。「300人の手紙」はルィセンコ、およびその同調者による粗暴なふるまいを明らかにし、状況の改善、生物科学の正常化を訴えたものであったが、正常化を願う生物科学の研究者たちが、1949年8月29日のソ連邦初の原子爆弾РДС-1の爆破実験成功から、1953年8月12日、初の水素（熱核）爆弾РДС-6の実験成功まで、きわめてわずかな期間における核兵器開発の成功に貢献したことでソヴィエト社会におけるその権威を著しく高めた物理学者、数学者を多数巻き込んだところに、新しい科学者の社会運動の形態があった。しかし、結局、この「300人の手紙」は、さしたる効果も発揮せず、1987年に党機関紙『プラウダ』に記事が掲載される³⁷まで、このようなことがあったことも公開されなかった。

いわゆるスターリン批判として知られるニキータ・フルシチョフの「秘密報告」が行われたソ連邦共産党第20回大会のあとのことではあるが、1956年秋、科学アカデミー総裁選挙が実施された。候補は現職のネスメヤーノフひとりで、結果的には彼が再選された。その選挙への候補者推薦のために、科学アカデミーの各部で部総会があいついで開催されていた時期、10月12日に開催された幹部会の席上、科学アカデミー主任学術書記アレクサンドル・トプチエフ（Александр Васильевич Топчиев：1907-1962）は10月10日に開催された物理・数学部の総会で起こったできごとについて報告をした³⁸。この部総会の途中、5名の高名な物理学者から、総裁選挙を翌年2月

の科学アカデミー・年次総会まで延期するよう提案があったのである。提案したのは、タム、ミハイル・レオントヴィチ（Михайл Александрович Леонтович：1903-1981）、アルツィモーヴィッチ、グリゴリー・ランズベルグ（Григорий Самуилович Ландсберг：1890-1957）、それにカピツァという錚々たる顔ぶれであった。彼らは、ドゥビーニンを長とする新しい遺伝学研究所³⁹がいまだに創設されていないこと、ネスメヤーノフが生物科学の状況に根本的な変化をもたらしていないこと、などを理由に、翌年2月の年次総会で、ネスメヤーノフから年次報告と綱領的な方向性をしめした演説を聴いたのちに総裁選挙を実施すべきだとした。討議の結果、ネスメヤーノフを物理・数学部として総裁候補に推薦する件と総会に対して総裁選挙の延期を要請する件とは別個に議決が行われ、前者は18対16で、後者は22対12でそれぞれ採択された。つまり、ネスメヤーノフ再選に異議はないが、再選の前に生物科学の現状を改善する姿勢を見せろ、という要求であった。「300人の手紙」の件で接触・交流した生物学者たちとの連帯をしめすできごとであるとともに、戦後飛躍的に高まった物理学者の権威と自負がなせるわざでもあった。12日の幹部会では、トプチェフの報告の直後、物理化学者のミハイル・ドゥビーニン（Михайл Михайлович Дубинин：1901-1993：ニコライ・ドゥビーニンとはまったく別人）が5名の物理学者を支持する旨、意見表明をした。生物科学部を代表してヴラジーミル・エンゲリガルド（Владимир Александрович Энгельгардт：1894-1984）がネスメヤーノフを支持する発言をしたあと、若手の幹部会員ケルドウィッシュが発言をもとめた。「われわれは（ネスメヤーノフの…引用者）年次報告を聴かなければなりません。しかし、われわれはみな、科学アカデミーの一員です。科学アカデミーの状況を知っておく義務があります」⁴⁰。彼は言外にリュセンコ派がまだ実権を持っている科学アカデミーの現状を思い起こさせ、冷静な対応を幹部会員にもとめたのである。こうして5名の物理学者による提案は採択されることはなかった。

Ⅲ. 科学アカデミーの機構改革について

科学アカデミー内に置かれていた学問分野別の「部」の規則を整備するために、1953年11月6日の幹部会ではケルドウィッシュの提案が討議され、規則案作成のために、主任学術書記トプチェフを長とする委員会が置かれることとなった。残念ながら、ケルドウィッシュの提案についてその詳細を知ることはできなかったが、幹部会に出席していたコンスタンチン・オストロヴィチャーノフ（Константин Васильевич Островитянов：1892-1969：経済学）のまとめによれば、それは「現在のシステムが官僚主義的な秩序の欠陥を病んでいるので、学術指導を非集中化（Decentralization）し、各部のビューロー（常設の指導機関…引用者）や研究所により大きな独立性を与えようという点に課題が置かれている」⁴¹のものであったらしい。アレクサンドル・オパーリン（Александр Иванович Опарин：1894-1980）はすぐに賛意をしめしたが、セルゲイ・フリスチャノヴィチ（Сергей Алексеевич Христианович：1908-2000：力学・航空工学）は、ケルドウィッシュの提案が各部の書記役アカデミー会員（Академик- секретарь：各部の事実上の責任者）をまるで「コサックのアタマン（頭領…引用者）」のように描いていることに反発し、トプチェフは集権的なコントロールが幹部会に集中していて、各部はかなり名目的な存在となっている現状を説明した⁴²。

このとき設けられた委員会の結論は1954年12月3日の幹部会で審議され、12月14日に招集される幹部会総会で採択に附されることになった⁴³。トプチェフは報告のなかで、科学アカデミーの諸機構の人員が増え続けており、それに伴って管理の多段階化（複雑化）、新しい管理の環の形成が続いていること、行政・管理機構は4,000人近く、つまり研究員7名に1名の割合で事務職がいるというレベルにまで膨れあがっており、幹部会だけで763名が約200の部課に別れて働いている、と述べ、科学アカデミーの深刻な官僚主義的膨張に警鐘を鳴らした⁴⁴。ついで、この委員会のメンバーでもあったアレクサンドル・ヴィノグラードフ（Александр Павлович Виноградов

:1895-1975：地球化学)が「われわれには、いわゆるアメリカ的な事務能力などないものだから、…」と付け加えた⁴⁵。

こうして、非集中化＝分権化と肥大化した事務部門の整理という科学アカデミーの機構改革は、この“脱スターリン化”期に深刻な課題として認識されるようになり、その解決のための努力も開始されたが、本稿が対象とする1956年中までには進展を見ることがなかった。

こうした機構改革と同時に、この時期における科学アカデミーの機構に関してとくに注意を惹くのは、研究情報の流通拡大をめざす動きがあったことであろう。ひとつは、1954年5月28日の幹部会で科学研究の秘密性の基準に関する提案をつくる委員会が、ニコライ・ドブローチン(Николай Алексеевич Добротин :1908-2002：物理学・宇宙線。当時、幹部会学術書記を兼務)を長に組織されていることである⁴⁶。残念ながら、この件についても後続の資料がなく、その後の経過をうかがい知ることはできないが、ともかく秘密解除に向けた動きがあったこと自体記憶に値する。

もうひとつは、1955年12月23日の幹部会で、科学アカデミー・科学情報研究所を改組・大幅拡充し、新たにソ連邦閣僚会議附属新技術国家委員会と共同の機関である全連邦科学技術情報研究所に再編することが承認されたことである⁴⁷。この措置は、西側諸国駐在の大使館への技術アタッシェの任命・配置や1955年9月2日付閣僚会議布告にはじまる専門家の海外訪問緩和措置⁴⁸と並んで、スターリン死後の国際情勢の変化、すなわち冷戦の一定の緩和を背景に、海外の科学情報の積極的受け入れ・流通拡大をめざす措置の一環となった。

おわりに

“脱スターリン化”がさらに進んだ1958年10月、「自然科学の哲学的問題に関する全連邦会議」と称する学術集会が開催され⁴⁹、そこで報告をおこなったものは全員、「閉会にあたっての報告者の言葉」を述べるように求められた。ソボレフ

は、みずからの閉会発言のなかで、「物理学を唯物論的物理学と観念論的物理学に分けることなどできない。この原子爆弾は唯物論的だが、あれは観念論的だ、とか、この粒子加速器は観念論的だが、あれは唯物論的だ、などと言えるわけがない」と自然科学とその成果にたいする哲学者からのいかなるレッテル貼りも拒否することを堂々と宣言した⁵⁰。哲学者・党イデオログの科学研究活動への容喙という、科学者の頭上に垂れ込めていた暗雲を払い除けようとする企ては、本稿で確認できたように、スターリンの死の直後からはじまり、党イデオログの代表的人物であったゲオルギー・アレクサンドロフの政治的失脚という偶然に加速されるかたちで大きく進展した。

ソ連邦の科学者が歩んだ道には、西側の観察者の眼から見て“突飛なできごと (bizarre events — クレメンツォフ)”が多いが、その最たるものがルィセンコ学説の興亡であることに異論をもつ人は少ないであろう。本稿が対象とする時期を通じてルィセンコ派はスターリンの死去にもかかわらず、その実権を維持し続けていた。したがって、ルィセンコ派支配の現状打破のためにはたいへん慎重な対応が必要であったが、科学アカデミー幹部会が、この時代多数いたであろう“二心者”のひとりであったグリゴリー・フルシチョフの提案に沿って、ルィセンコ派が貶めた科学者の再評価・復権を進めたことは“脱スターリン化”最初期における生物科学分野の正常化をめざす科学者の努力として記憶されなければならない。また、生物科学の正常化のために生物科学研究に従事する多くの科学者が物理学や数学分野の科学者を巻き込むかたちで「300人の手紙」への署名運動を組織したことも、科学者の社会層・社会集団としての主体性と分野を超えた連帯の向上を物語るものと言えよう。

総じて、“脱スターリン化”が明確となるソ連邦共産党第20回大会以降の時期にかなり先行して、科学アカデミー幹部会における審議は、問題ごとにテンポは違ってはいたものの、慎重に、おずおずとしながらではあるが、着実に“脱スターリン化”に向かっていた。

しかしながら、早くもこの時期に明らかとなっ

た別種の問題にも注意しなければならない。ルイセンコ学説の優越に見られるような、しばしば不合理な介入・容喙をおこなう権力に対してみずからとみずからの科学研究の利害を擁護するためにも、科学者はみずからの自治的組織であり、権力との交渉の媒介環でもあった科学アカデミーを強化しなければならなかった。第2次世界大戦、そして冷戦初期を通じて科学者は、したがって科学アカデミーはソヴィエト社会のなかで揺るがぬ信頼と権威を固め、さらに“脱スターリン化”のなかでその自治的性格を強めてゆく。すると、今度は科学者（の代表）による科学研究への統制が問題となりはじめた。科学アカデミーの組織的強化

にともなって肥大化しつつあった行政・事務機構が、科学研究の現場の要求から科学研究の方向性に関する意志決定を遊離させようとしていた。ケルドウィッシュなど、この時代にすでにこの問題に気づき、是正を提起した指導的な科学者もいたが、事態は改善されず、現代ロシアの科学史家ボリス・イヴァノフ（Борис Ильич Иванов : 1939-）の表現を借りれば、科学アカデミーは1960年代には“管理不能なスーパー・システム”⁵¹に転化していったのである。とはいえ、この点の吟味はさらなる研究を待たなければならないのであろう。

注

- 1 スターリンの生物科学，言語学両分野における論争への介入の経過については，拙著『冷戦と科学技術—旧ソ連邦 1945～1955年—』（ミネルヴァ書房 2007年）の142-143ページの注（71）に紹介しておいた。ご参照を乞う。
- 2 В. Померанцев, “Об искренности в литературе”, «Новый мир». №12, 1953. сс.218-245.
- 3 “Наука и жизнь”, «Коммунист» №3, 1954. сс.3-13.
- 4 Zhores A. Medvedev, *The Rise and Fall of T.D. Lysenko*, Columbia University Press, 1969. 邦訳がある（メドヴェージェフ著，金光不二夫訳『ルイセンコ学説の興亡』河出書房新社，1971年）。
- 5 ソヴィエト社会とそこにおける科学のあり方を，資料公開の今日的水準に照応した新しい視点から論じた論者のなかで，イデオロギーの茂みに隠れていた科学者を取り巻く「制度的構造，競争するグループ・個人の相互作用，職業的カルチャー」を明らかにしようとしたクレメンツォフ（Nikolai Kremntsov, *Stalinist Science*, Princeton University Press, 1997. 引用した文章は p.287），物理学分野を対象に，科学者の行動の枠組みとなった，複雑な権力関係やイデオロギー装置を剔抉したアレクセイ・コジェフニコフ（Alexei Kojevnikov, *Stalin's Great Science*, Imperial College Press, 2004）も，“脱スターリン化”過程は扱っていない。先に挙げたメドヴェージェフなど，時期的には“脱スターリン化”期を扱っていても，関心の対象が1965年によく終結するルイセンコの生物学，農業科学支配であるため，“脱スターリン化”過程を本格的な分析対象とはしていないものが多い。
- 6 Slava Gerovitch, *From Newspeak to Cyberspeak: A History of Soviet Cybernetics*. The MIT Press, 2002. : サイバネティクス支持者たちの“挑戦”成功の理由をゲローヴィッチは権力と科学者との“同床異夢”に原因をもとめている。彼は，科学者はサイバネティクスの意味を拡張し，ソヴィエト科学全般の脱イデオロギー化を図ろうとしたが，他方，ニキータ・フルシチョフからレオニード・ブレジネフへと続く政権の側は広い範囲におけるイノベーションと権力掌握をたすける情報・技術的手段の確保をもとめ，サイバネティクス化を肯定した，としている（*Ibid.*, p.292）。
- 7 Kremntsov, *Op. cit.*, in the note (5). pp.96-99.
- 8 See, Hiroshi Ichikawa, “Strela-1, the First Computer: Political Success and Technological Failure.” *IEEE Annals of the History of Computing*. Vol.28, No.3, 2006. pp.18-31.（前掲著者—注（1）—に第7章—277～312ページ—として収録されている）。
- 9 ロシア／旧ソ連邦／ロシア科学アカデミーの歴史的特質とその研究の課題については，市川浩編『“科学の参謀本部”—ロシア／ソ連邦／ロシア科学アカデミーの総合的研究—』論集 Vol.1（平成22年度

- ～24年度日本学術振興会科学研究費補助金〔基盤研究(B)〕【課題番号:22500858】研究成果中間報告) , 1～3ページを参照のこと。なお、この報告書はインターネットで見ることができる (<http://home.hiroshima-u.ac.jp/ichikawa/kagaku1.pdf>)。
- 10 さらに、「国民経済における『生産の自動化』への貢献」を第4の論点としてあげることもできよう。この問題は旧ソ連邦におけるコンピュータ開発、ひいてはサイバネティクスの導入・普及というきわめて重要な論点につながってゆく問題でもあるが、本稿が対象としている時期の最終期に、ソ連邦共産党第20回党大会決議に触発されて論議されるようになった、という点で、ここに掲げた3つの領域における討論がもつ意味とはかなり性格が異なっているものと考え、取り上げなかった。
- 11 前掲拙著一注(1)一, 112～153ページを参照のこと。
- 12 Gerovich, *Op. cit.*, in the note (6) p.7.: たとえば、「サイバネティクス」は哲学研究所編『哲学者ぶつた米英帝国主義追従者に抗して—現代米英ブルジョワ哲学・社会学批判要綱—』のなかにミハイル・ヤロシェフスキー (Михаил Григорьевич Ярошевский: 1915-2001: もともとは心理学者。のち科学史に取り組む) が執筆した「意味論的観念論—反動の哲学—」と題する章の末尾近くで、「思考とは記号の操作にほかならず、しかもこうした操作の理想的な形態として数値計算があらわれてくる、という意味論的アンチ啓蒙家お得意の信念を基礎」に「置く」サイバネティクスを意味論の延長上にある最新の思潮として紹介している [М.Г. Ярошевский, “Семантический идеализм— философия империалистической реакции”, Институт философии АН СССР, «Против философствующих оруженосцев американо-английского империализма: Очерки критики современной американо-английской бружуазной философии и социологии». Изд-во Академии наук СССР, 1951. сс.88-101. 彼は1952年4月5日付『文学新聞』に同趣旨の論文「サイバネティクス—アンチ啓蒙家の科学—」を発表している—М.Г. Ярошевский, “Кибернетика: 'Наука' мракобесов”, «Литературная газета», 5 апреля 1952. стр.4.—]。ゲローヴィッチによれば、ヤロシェフスキーは非党員で、1938年には逮捕されており、この段階では新たに“コスモポリタニズム”の故をもって、タジクスタンに左遷されていた。彼にとってこの論文は起死回生の一打となるはずであった (*Ibid.*, pp.122,123)。しかし、一時スターリンの娘婿であったユーリー・ジダーノフの回想 (Ю.А. Жданов, “Во мгле противоречий”, «Вопросы философии» №4, 1993. стр.89) によれば、スターリン自身はサイバネティクスに反対などどころか、ロケット開発などを支える数理科学に必須のものと考えていた。このため、ヤロシェフスキーら哲学者・党イデオログのサイバネティクス批判は、とくに権力上層部からの指示/支持があつておこなわれたものではなかったことになる。ゲローヴィッチが“永久機関的 (self-perpetuating)” と評価したのはこうした事情を指している。
- 13 Институт философии АН СССР, Указ. соч. в примечании (12).
- 14 Архив РАН Ф.1922, Оп.1, Д. 726. лл.110-115.
- 15 Архив РАН Ф.2, Оп.6, Д. 148. лл. 78,79.
- 16 この時代のユーリー・ジダーノフについては、さしあたり、前掲拙著, 122, 126, 141～145ページを参照されたい。
- 17 И.Р. Гринина, С.С. Илизаров, “Отдел науки ЦК КПСС в период политического кризиса 50-х годов”, Институт истории естествознания и техники, «Годичная научная конференция. 1996г.». сс.79-87.: なお、ユーリー・ジダーノフはロストフに左遷され、当地の国立大学の助手、そして准教授 (Доцент を仮にこのように訳しておいた) として勤務するようになった。そこで、彼はもともとの専門であった化学の研究に立ち帰り、1960年に学位をとり、翌年教授に昇進した。その間、まだ准教授であった1957年から1988年にいたるまで31年間のながきにわたりロストフ国立大学の学長職を勤めている。
- 18 解任は3月10日で、その理由は指導力不足とされたが、ニキータ・フルシチョフの覇権確立にともなう事象であろう。その後、彼はミンスクにあった白ロシア科学アカデミー・哲学=法學研究所のセクター主任に左遷されている (К.А. Залесский, «Империя Сталина: Биографический энциклопедический словарь». Москва, Вече, 2000г. стр.19)。1961年6月21日、脳内出血で亡くなった。

- 19 Архив РАН Ф.2, Оп.6, Д. 194. лл. 24-27.
- 20 Там же, лл.135-146.
- 21 Там же, л.147. : 科学者 (のグループ) が相互に利害を対立させた場合, その対立はしばしばイデオロギー闘争のかたちをとった。そして, 権力はその仲介者として立ち現れることで対立する両グループから“忠誠”をえることができた (たとえば, 前掲拙著 99~153 ページを参照のこと)。このフォックの発言はそれを裏書きしているようで興味深い。
- 22 Там же, лл.148-151.
- 23 Архив РАН Ф.2, Оп.6, Д. 195. лл. 219-224.
- 24 Архив РАН Ф.1922, Оп.1, Д. 726. лл.110-113.
- 25 С.Л. Соболев, А.И. Китов, А.А. Ляпунов, “Основные черты кибернетики”, «Вопросы философии».№4 1955. сс.136-159. : この論文掲載の画期的な意義については, ゲローヴィッチ, *Op. cit.*, pp.173-181.
- 26 Архив РАН Ф.1647, Оп.1, №№. 104. л. 6.
- 27 Kremontsov, *Op. cit.*, in the note (5), pp.105,106.
- 28 В.Н. Сойфер, «Власть и наука : разгром коммунистами генетики в СССР». Изд-во. “ЧеРо”, 2002. ссю607,607.
- 29 Архив РАН Ф.2, Оп.6, Д. 149. лл. 192-204.
- 30 Архив РАН Ф.2, Оп.6, Д. 92. л. 156.
- 31 Архив РАН Ф.2, Оп.6, Д. 149. л. 311.
- 32 Там же, л.189.
- 33 Архив РАН Ф.2, Оп.6, Д. 152. л. 12.
- 34 Архив РАН Ф.2, Оп.6, Д. 192. л. 254.
- 35 Архив РАН Ф.2, Оп.6, Д. 210. л. 26.
- 36 “Письмо трёхсот”, Под ред. А.Ф. Киселёва и Э. М. Щагина, «Хрестоматия по отечественной истории (1946-1995)». Изд-во “Владос”, 1996. сс.458-460.
- 37 «Правда» 27 января 1989.
- 38 1954年10月29日の幹部会では, 一旦生物科学部から提案された「細胞学研究所 (Лаборатория цитологии : この場合の研究所は通常のインスティテュートではなく, ラボラトリーであり, 小規模なものが想定されている)」設置案が取り下げられている。ドゥビーニンの名前は出ていないが, 5名の物理学者の不満とはこのことを指しているのではないかと考えられる (Архив РАН Ф.2, Оп.6, Д. 230. лл. 160,161.)。ちなみに, ドゥビーニンは1957年新設された科学アカデミー・シベリア支部の細胞学・遺伝学研究所の所長となっている。
- 39 Архив РАН Ф.2, Оп.6, Д. 178. л. 44.
- 40 Архив РАН Ф.2, Оп.6, Д. 230. лл. 163-172. Келрдоу Итшюの発言は, л.172に見られる。
- 41 Архив РАН Ф.2, Оп.6, Д. 162. л. 32.
- 42 Там же, лл.25, 30, 39.
- 43 Архив РАН Ф.2, Оп.6, Д. 180. л. 112.
- 44 Там же, л.140.
- 45 Там же, л.176.
- 46 Архив РАН Ф.2, Оп.6, Д. 170. л. 197.
- 47 Архив РАН Ф.2, Оп.6, Д. 207. л. 32.
- 48 Zhores Medvedev, *Soviet Science*. W. W. Norton & Company, 1978. pp.60-67.
- 49 Под ред. П.Н. Федосеева и др. «Философские проблемы современного естествознания : Труды Всесоюзного совещания по вопросам естествознания». Изд-во АН СССР. 1959. сс.3,4.
- 50 Там же, стр. 573.
- 51 Борис・イリイチ・イヴァノフ (レギーナ・ヤキメンコ訳) 「ソ連邦科学アカデミー・工学部 (1935~1963年) —設立, 発展, 廃止の歴史—」, 市川浩編『“科学の参謀本部” …』前掲一注(9)—, 38ページ。

【附記】本稿は, 日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究 (B) 「“科学の参謀本部” —ロシア/ソ連邦/ロシア科学アカデミーの総合的研究—」 [研究代表者—市川 浩:課題番号 22500858] による研究成果の一部である。